

第4章 各教科等における具体的な取組

1 国語科

(1) 国語科における学習内容の関連

国語科において思考力・判断力・表現力を育成する学習内容の関連は、「話す・聞く能力」, 「書く能力」, 「読む能力」を育成する指導事項の関連と捉える。それぞれの能力は、「話すこと・聞くこと」, 「書くこと」, 「読むこと」の単元において、単元を貫く言語活動を通して指導された指導事項が身に付くことで育成される。そこで、指導事項を関連付けながら系統性や段階性を踏まえ、重点化を図ることで、意図的・計画的な言語能力の育成が可能になる。したがって、いつ、どの単元間や領域間又は科目間で、どのような言語活動を通して、どの指導事項を関連させて指導するのかを、教師が年間を見通して工夫することが大切である。

図10は、小学校第4学年における文学的な文章を教材としたときの学習内容の関連を、学習指導要領「読むこと」(1)ウの指導事項で説明したものである。「文学的文章の解釈」に関する指導事項には「叙述を基に想像して読む」際の対象が複数盛り込まれている。

例えば、単元①では、

音読を通して「場面の様子」について考えさせる。単元②では、感想交流会を通して場面の様子を踏まえて登場人物の「心情の変化」について考えさせる。単元③では、それらの力を活用して登場人物の「人物像」について考え紹介させる。そして、単元④では、それまでの積み重ねを基に、「人物」, 「心情」に加えて「情景」についても考えさせ、読書発表会を行う。つまり、単元①から③においては、思考・判断する対象を「場面の様子→心情の変化→人物像」と移行させ、単元④で、それらを総合的に扱うよう配列することで、学習内容の関連を踏まえながら、「読む能力」を身に付けさせることができる。

このように、教材文の特性や言語活動との関わりに基づいて、指導事項に含まれる要素を分析し、系統的・段階的に位置付けることで、習得・活用すべき知識・技能や単元間における学習内容の関連が明確になり、継続的な思考力・判断力・表現力の育成が可能となる。なお、学習内容の関連については、領域間や科目間で関連付けた指導も考えられる。

(2) 国語科における学習内容の関連を踏まえた指導

ア 知識・技能の活用を図る学習活動

教材文を使って「読む能力」の育成を図った後、その教材文をモデルとした「書く能力」の育成を図る単元を構想することがある。その際、指導事項の関連を踏まえることで、習得した知識・技能を、相手、目的や意図、多様な場面や状況などに応じて活用する活動を効果的に設定することができる。これにより、国語科の最も基本的な目標であり、連続的かつ同時に機能する、適切に表現する能力と正確に理解する能力を育成することができる。と考える。

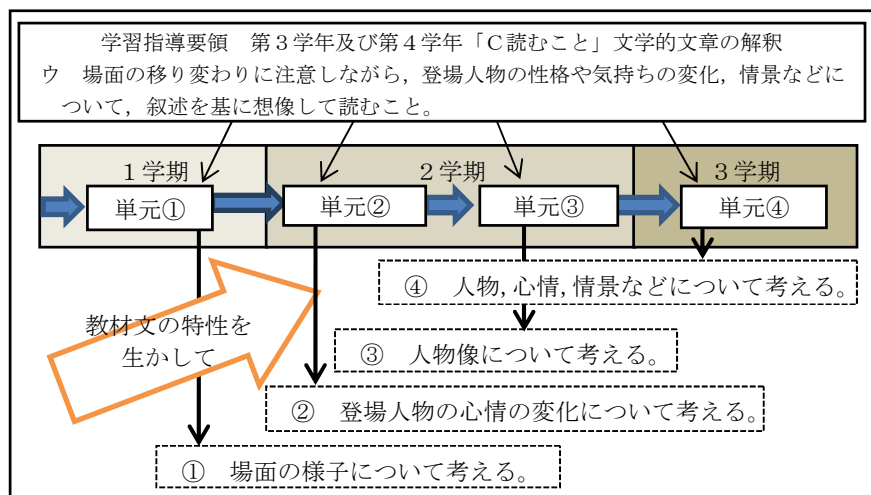


図10 文学的文章を扱った単元間における学習内容の関連

表2は、中学校第1学年における「読むこと」と「書くこと」の複合単元を指導する際に、習得した知識・技能をどのように活用していくかをまとめたものである。

表2 説明的文章を扱った複合単元における、習得した知識・技能の活用

単元名	教材名	身に付けさせたい指導事項の関連	
		「読むこと」の領域	「書くこと」の領域
報告文を書こう (5月)	ダイコンは大きな根?	(1)イ 文章の解釈 中心的な部分と付加的な部分、事実と意見を読み分ける。	(1)ア 課題設定や取材 課題を決め、材料を集め、考えをまとめる。
段落を意識した条件作文を書こう (6月)	ちょっと立ち止まって	(1)イ 文章の解釈 目的や必要に応じて要約したり要旨を捉えたりする。	(1)イ 構成 段落の役割を考えて文章を構成する。
図表を添えて記録文を書こう (10月)	シカの「落穂拾い」	(1)エ 自分の考えの形成 文章の展開や構成、表現の特徴について、自分の考えをもつ。	(1)ウ 記述 自分の考えを根拠を明確にして書く。

例えば、5月の単元「報告文を書こう」では、まず、「問い」と「答え」が明確な説明文教材を使い、事実や意見を整理する方法を学ぶ。次に、習得したそれらの力を使い、報告文を書くという流れで指導事項を関連させることで課題設定や取材の力を定着させる。同様に6月、10月にも筆者の構成や記述の仕方を学んだ後、その知識や技能を自身の作品づくりに活用させる(表2 → 方向)。さらに、5月に習得した課題設定や取材に関する知識・技能は、6月の条件作文を書くという単元において、最低限必要な力となり、6月に習得した構成に関する知識・技能は、10月の記録文を書く際に役立つ力となる(表2 ↓ 方向)。

イ 見通し・振り返り学習活動

習得と活用を繰り返しながら指導事項を身に付けていく単元の指導過程において、見通し・振り返りを行う場面について、図11のような単元を貫く言語活動のモデルで説明する。

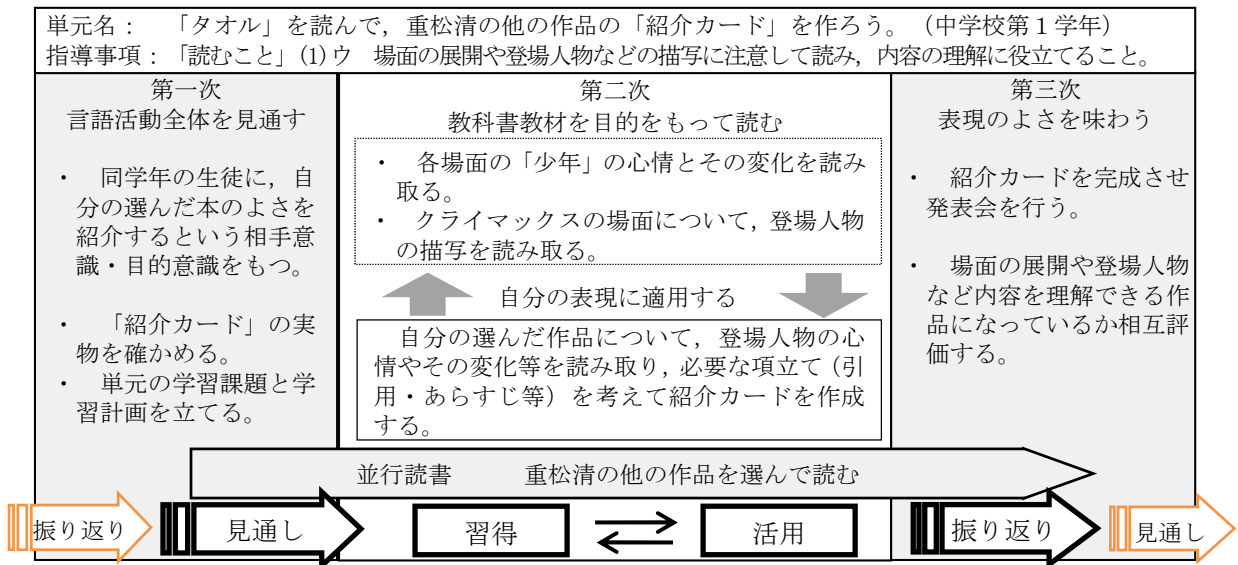


図11 学習内容の関連を踏まえて設定した、単元を貫く言語活動の例

単元の最初に、登場人物相互の関係に基づいた行動や会話、情景などを通して描写された心情を捉える力を小学校高学年で習得したことを振り返らせる。第一次では、「紹介カード」を作成する言語活動を示すとともに、言葉を手掛かりにして文脈をたどり、「少年」の心情や行動、情景描写などに注意して深く読み取っていくという見通しを立てさせる。そして、第二次では、教科書教材の読み取りの際に習得した力を活用させながら、並行読書している作品の内容理解

に役立てていく。第三次では、作品発表の場において相互評価の学習活動を設定し、身に付けた力を振り返らせるとともに、次単元で身に付けさせたい力である表現の工夫や効果について自分の考えをもつことを意識させる。

(3) 国語科における学習内容の関連を踏まえた「判断基準」の設定と評価

ア 「判断基準」の設定

思考力・判断力・表現力を評価するためには、評価規準を基にノートやワークシート等に表れた児童生徒の表現を見取ることが大切である。その際、「判断基準」を設定し「予想される児童生徒の表現例」を想定しておくことで、効果的・効率的な評価と指導が可能になる。

また、指導事項の関連を踏まえることでその精度をより高めることができる。例えば、表3に示す既習単元と本単元では、共に中学校第1学年「書くこと」の指導事項ア・イ・ウを指導するが、既習単元では指導事項のイ、本単元では指導事項ウを重点的に指導する。既習単元で確実に実施された指導と評価が本単元の重点指導に効果的・効率的に生かされることになる。

表3 単元間における「判断基準」等の関連（指導事項：イ構成、ウ記述）

既習単元		本単元
単元名：「段落のまとまりを意識して書こう」 教材名：「ちょっと立ち止まって」		単元名：「図表を添えて記録文を書こう」 教材名：「シカの『落穂拾い』～フィールドノートの記録から」
評価規準		評価規準
○ 書く能力 適切なテーマを選択し、 <u>段落の役割を考えて作文を書いている。</u>	既習単元の判断基準Bのイやウを関連させて指導する。記録・仮説・検証・考察の一連の流れに沿った記述がスムーズに進む。	○ 書く能力 論理展開を意識し <u>図表を効果的に活用するなど根拠を明確にして記録文を書いている。</u>
評価の対象		評価の対象
○ 選択したテーマに基づいて書いた作文		○ 生徒が書いた記録文 ○ 評価用紙
判断の要素		判断の要素
ア テーマ イ 段落構成 ウ 具体例・理由と自分の考え エ 適切な記述		ア 論理展開 イ 事実と考えの書き分け ウ 図表の使用 エ 適切な記述
判断基準B		判断基準B
ア 選択テーマに合った作文を書いている。 イ 「初め、中、終わり」の三段落構成の作文を書いている。 ウ <u>中の段落に具体例や理由を入れ、終わりの段落に自分の考えや抱負を書いている。</u> エ 適切な語句や文末表現等を使って表記している。		ア 論理展開を意識し、小見出しに合わせて記録文を書いている。 イ 事実と考えを書き分けている。 ウ <u>図表、写真、イラストなどを使用し、根拠を明確にして、記録文を書いている。</u> エ 適切な語句や文末表現等を使って表記している。
【予想される生徒の表現例】	展開の意識「考え」がより深まりがより強くなったりするなどの効果が得られる。	【予想される生徒の表現例】 自分にとってベストバランスの確立まで
私の夏休みの目標は、走る練習をして動ける体を作ることです。 理由は、二学期になると、体育祭があり、学級対抗で全員リレーをするからです。私は、日頃運動をせず、走る事が苦手です。小学校の運動会でも、50mを過ぎたあたりからスピードがグンと落ちてしまいました。今回は、学級27人と、担任、副担任の先生でバトンをつなぐことになっています。 中学校に入って初めての体育祭です。アンカーがゴールしたときに、私もみんなも全力を出せたという達成感を味わいたいと思っています。だから、この夏休みは、毎日、走る練習を頑張ります。		1 既習単元のまっぴり 私はバスケットボール部に入っている。バスケットボールは身長が高い方が圧倒的に有利だ。でも、私はとても身長が低い、身長が低い、家庭環境の悪さで、中学一年生は成長期だということを知り、成長期の今、身長を伸ばすためには、どんな食事をしたらいいのかわからないと考える。既習単元で学んだことを活かして、 2 3日間の食事記録から分かること 9月11日から13日までの3日間に私は次のような食事をした。 表1 3日間の食事記録 また、栄養士の川原先生から既習を立てる時のポイントとして下の2点を教わった。 ① 中学生女子は1日2000キロカロリーを目安に食事をする。 ② 1食から5食まででの食量調整の食事を食べるようにし、食研があるべく、量なりによいようにすること。 ③ 「主食」「副食」「汁物・献立物」の4つの皿をそろえること。 「食事記録は川原先生の絵と比較すると、次のようなことが分かった。 ・朝食を合わせて5食ごはん、パン、麺類、半碗、炒め物が多い。 ・3食減量色野菜が少ない。 ・朝は2食半碗、小碗、味噌汁が少なくない。 3 既習の検証 身長を伸ばすバランスのよい食事をするために、次のような仮説を立てた。 ① 1食から5食まで入れた既習を考えた方がいいのではないかと。 ② 減量色野菜をたくさん食べられる既習を考えた方がいいのではないかと。 4 既習の検証 1食から5食まで全ての食研が入り、減量色野菜をたくさん食べられる、次のような夕食を作ることにした。 表2 夕食の調理 表3 既習に食べた既習記録表 既習について 1食から5食まで全ての食研を入れて夕食を作ることができた。なるべく減量色野菜にならないように、主食は、朝食で食べた、昼食で食べた既習以外の食研から選び、サバの焼き魚にした。 既習について ほうれん草を捨てて食べたため、ほうれん草以外の減量色野菜から食研を選び、ピーマン、ニンジン、ニラを入れて野菜炒めを作った。塩を減らすことで、砂糖、牛乳しかならぬ調味料に関する料理を一品考えることができた。 5 仮説 既習を考えた時は、向を好み、野菜の少ない既習をしていた。既習に夕食を作ってみると、野菜炒めだけでなく、おみそ汁にもたくさん野菜を入れることが分かった。成長期におさむしいバランスのとれた既習となった。今回は、作った料理のカロリーを計算したり、両食に食事のタイミングや量などを考えたりして、少しでも身長を伸ばすような既習を心がけていきたいと思う。 ☆ 参考図書

イ 「判断基準」に基づく評価

指導事項については、自ら学び、課題を解決していく能力の育成を重視し、学習過程が明確化されている。「書くこと」の領域では、課題を設定し材料を集め構成を考え記述し、推敲を経て交流するという一連の流れの中で、既習単元では構成の段階までを、本単元ではそれに加えて記述の段階までを重点的に評価する。このように明確化された学習過程において、指導事項の関連を踏まえて「判断基準」を設定することで、生徒は学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりすることが容易になるとともに、教師も常に指導と評価の一体化を意識することができる。

(4) 国語科における「判断基準」に基づく評価結果を踏まえた指導

「判断基準」に基づく評価を指導につなげるためには、評価補助簿の活用が有効である。判断基準Bを満たした項目には○を付け、満たさなかった項目は×と不十分な点を備考欄に記入する。判断基準Aに達したのものには◎を付け、備考欄に工夫が見られた点を記入する。関連単元の評価簿を確認しておくことで、本単元で個々の生徒にどの「判断基準」による学び直しが必要かが見えてくる。

表4 本単元における評価補助簿

判断基準 氏名	ア 展開	イ 裏考え	ウ 図表	エ 表記	評価	備考
A	×	○	○	○	C	検証
B	×	○	○	×	C	検証, 文末
C	○	○	◎	○	A	図表, グラフ

また、関連単元と本単元の評価簿を比較することで、生徒の変容も分かりやすくなる。

ア 補充指導

表3の本単元の実践における教師の補充指導による生徒の変容を示す。

判断基準Bのア「論理展開」がC状況

2. 産前記録から分かること
ぼくの三日分の食事をもろり返り、また、先生の話も聞いて、四皿(生魚、野菜、福菜、汁物)が入ってなかったことが分かった。

3. 仮説
ぼくは、自分が食べたものをみて、どうしたらバランスのよい食事になるか考えた。
・たくさんの種類の食材を使う。

教師の助言

「分かったこと」と仮説の表現のつながりが弱い。二つを照らし合わせて、「～なら～ではないだろうか。」の表現で仮説を考え直してみよう。

指導後の判断基準Bを満たす「仮説」の記述

四皿全てをそろえ、たくさんの種類の食材を使うならば、バランスのよい食事になるのではないだろうか。

イ 深化指導

表3の既習単元の実践における相互評価を生かした深化指導による生徒の変容を示す。

判断基準Aは、「具体例や理由が詳細で、考えの根拠がよく吟味されている」等が考えられる。

【指導後の作品】 私の夢 一年 ○○○○

私の夢は、助産師になることです。助産師には、正常なお産の場合に、医師の監督なしに出産を介助することや、妊娠、出産、産後までを見守る仕事があります。私が助産師を目指すのは、叔母が助産師をしていることが大きな理由です。私は、命を生み出す仕事をする叔母を日頃から尊敬しています。そんな叔母と同じ仕事ができるらと思っています。助産師になるためには、看護師養成機関で看護課程を修了した後、さらに一年間助産課程を学んだ上で、助産師国家試験に合格しなければなりません。私はこれから頑張っていきたいと思っています。

【教師の助言】

○ 初めの段落に、「助産師」という職業の紹介を書けば、三段落構成を意識した文章になりますよ。
【判断基準Bのイ】

○ 中の段落に、考えの根拠となる具体的理由や専門的な事例を挙げると、説得力が増しますよ。
【判断基準Bのウ】

【指導前の作品】 私の夢 一年 ○○○○

私の夢は、助産師になることです。叔母が助産師をしていることが大きな理由です。助産師になるためには、保健の勉強を頑張らなければなりません。でも、私は保健が苦手です。苦手な科目をなくし、宿題以外の勉強にも積極的に取り組まなければなりません。あこがれの存在である叔母のような助産師を目指して、私はこれから頑張っていきたいと思っています。

【判断基準Bを相互評価の観点とすることにより、級友の指摘を深化指導の助言の一部として利用することができる。】

【級友の指摘】

○ なぜ助産師になりたいと思ったのか、具体的な理由がほしい。
【判断基準Bのウ】

○ 宿題以外の勉強や必要な資格について触れた方がいい。
【判断基準Bのウ】

(5) 各学校の実践例

ア 小学校第2学年 単元名「読書感想文を書こう」

(7) 学習内容の関連を踏まえた言語活動の充実

- 学習内容の関連

「読むこと」と「書くこと」の関連

- 本単元における、知識・技能の活用を図る学習活動

本実践で取り上げた二つの単元は、「読むこと」と「書くこと」という異なる領域ではあるが、「感想を書く」という共通する言語活動を設定している。このことから、既習単元「読むこと」で習得した知識・技能「大好きなお話の感想を書くためのポイント」を活用して感想文を書く活動を、本単元「書くこと」で単元を貫いて位置付けた。

【既習単元で習得した知識・技能】

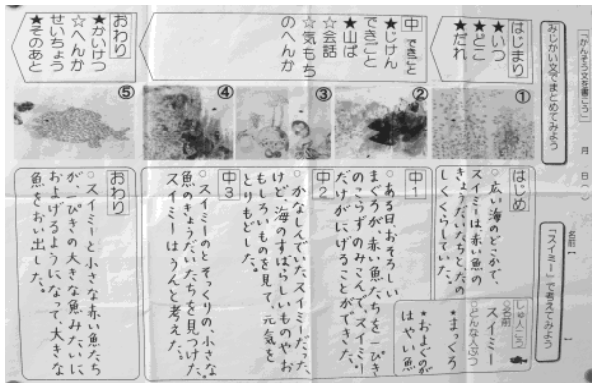
「大好きなお話の感想を書くためのポイント」
場面の様子や行動を基にして、人物の心情を想像して書く。(指導事項 読ウ)
お話の中で、一番好きな言葉や文を書き抜いて大好きな理由を説明する。(指導事項 読エ)

本単元
で活用

【本単元の活動】

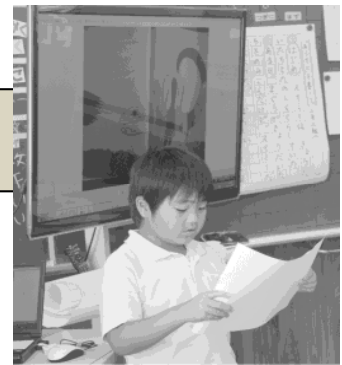
自分で選んだお話について、つながりのある感想を書く。(指導事項 書ウ)

- 本単元における、見通し・振り返り学習活動



既習単元の教材文を用いたモデルを提示し、本単元の見通しをもたせる

単元を貫く
言語活動



互いに感想文を発表し合い、感想文のポイントを振り返る。

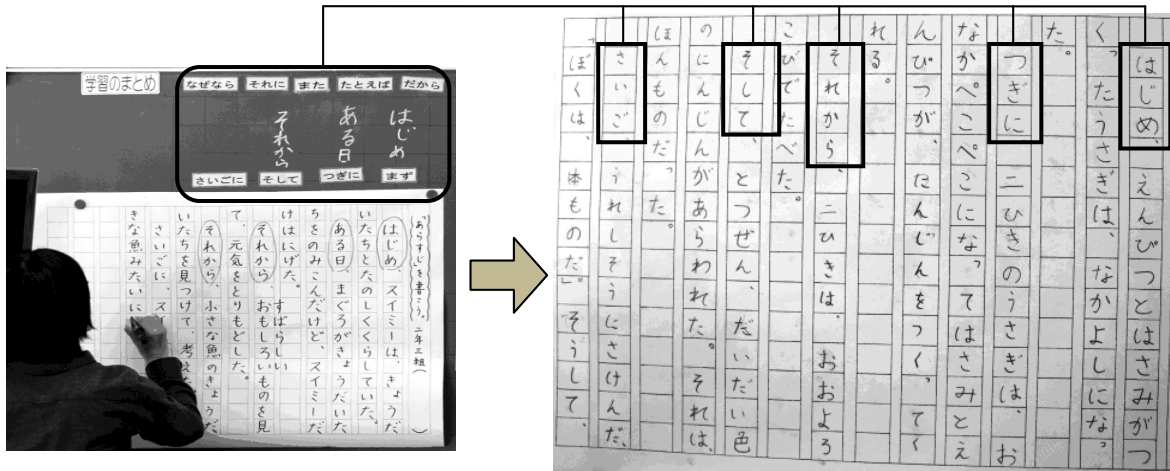
(イ) 学習内容の関連を踏まえた「判断基準」の設定

既習単元	本単元
単元名：物語を読んで、感想を書こう 教材名：「スイミー」	単元名：読書感想文を書こう 教材名：「お話の国の友だち」
評価規準	
○ 「スイミー」について、最も心に残った言葉や文を書き抜き、その理由を示すとともに、関連のある自分の経験と照らし合わせながら、想像を広げて読んでいる。(指導事項 読ウ, エ)	○ 自分が選んだお話について、人物の紹介やあらすじなどの要素を盛り込み、つながりのある感想文を書いている。(指導事項 書ウ)
判断の要素	
ア 最も心に残った言葉や文 イ アを選んだ理由	ア 人物紹介 イ あらすじ ウ 感想
判断基準B	
(いずれも感動を表す言葉を使って) ア 最も心に残った言葉や文を書き抜いている。 イ 言葉や文を選んだ理由を、想像を広げて書いている。	ア どんな人物であるかを、したことや出来事を中心に紹介している。 イ 場面ごとに、話の内容をまとめて、「つなぎ言葉+主語+述語」であらすじを書いている。 ウ 「スイミー」で学習した感想の書き方(判断基準Bのア,イ)を活用して、感想文を書いている。

<p>【予想される児童の表現例】 わたしは、スイミーが友だちに「ぼくが目になるう。」と言ったところが大好きです。なぜかという、わたしがもし魚のきょうだいたちで、そんなふうスイミーに言われたら、「よし、わたしたちもがんばるぞ。」とゆう気がわくだろうな、と思ったからです。</p>	<p>【予想される児童の表現例】 ジェラルディンは、音楽が大好きなねずみです。はじめに、ジェラルディンは、立って歩いていました。つぎにジェラルディンは、ほかのワニたちから～。それから～。そして～。さいごに～。 (既習単元での感想の書き方を生かして) わたしは、〇〇なところが大好きです。なぜかという、〇〇だと思ったからです。</p>
<p>判断基準 A</p>	
<p>(判断基準 Bに加えて) 自分の経験と比べることによって、登場人物の心情を想像して感想を書いている。</p>	<p>(判断基準 Bに加えて) 「これは、ジェラルディンがはじめて音楽というものを知って、とび上がっておどろくお話です。」など、話全体をまとめてあらすじを書いている。</p>

(ウ) 「判断基準」に基づく「思考・判断・表現」の指導と評価

全5時間中の3時間目 自分が選んだお話のあらすじを書く活動における指導と評価



「スイミー」で習得

自分が選んだお話で活用

本単元における、判断基準Bのイの達成に向けた指導については、予想される児童の表現例の形式を「(つなぎ言葉)、(だれ)が、(なにを)した。」と想定し、各場面において、「つなぎ言葉＋主語＋述語」の形式(例「はじめ、スイミーは、きょうだいたちとなかよくくらしていた。」)で書かせることとした。これは、低学年の指導事項の特徴である「順序性」を意図した取組である。その際、既習単元である「スイミー」を用いて書き方を習得し、それを参考にしながら自分が選んだお話で活用させたことによって、児童は「つなぎ言葉＋主語＋述語」の形式を用いて、各場面のあらすじを書くことができていた。

書くことが停滞している児童には、挿絵と照らし合わせながら、「この場面は、誰が何をしているのかな。」と発問し、話した言葉を書き留めさせることで、自分が選んだ話の場面を想像しながら書けるよう補充指導した。また、書けている児童には、「これは、〇〇〇が、〇〇〇して、〇〇〇なるお話です。」という形式を提示して、話全体のあらすじを一文でまとめさせる深化指導を行った。しかし、その際には、書いたもののどこを取り上げればまとめられるのかを簡潔に示すなどの手立てをとらなければ、2年生には難易度が高いことが分かった。

(エ) 成果と課題

○ 共通する言語活動に着目すると、異なる領域の指導事項に関連性をもたせて、当該領域の能力育成に向けてより重点的な指導が可能になることが分かった。

△ 発達の段階に応じて、6年間を見通した言語活動の具体的な想定を行う必要がある。

イ 中学校第3学年 単元名「分かりやすく説得力のある文章を書こう」

(ア) 学習内容の関連を踏まえた言語活動の充実

○ 学習内容の関連

第3学年学習指導要領「B書くこと」における、「課題設定や取材，構成」に関する指導事項と「記述」に関する指導事項

○ 本単元における，知識・技能の活用を図る学習活動

まず、「C読むこと」の領域について，対談形式による説明文教材「海馬」から，論理展開や言葉の置き換えによる説明の工夫などにより，内容理解が図りやすくなることを学ばせる。次に，「B書くこと」の領域について，論理展開，適切な引用，具体的な経験等を視点として与え，分かりやすく説得力のある記録文を書くという言語活動に取り組みさせる。下表は身に付けさせたい指導事項の関連をまとめて整理したものである。

単元名	教材名	身に付けさせたい指導事項の関連	
		「読むこと」領域	「書くこと」領域
弁論文を書こう	冥王星が『準惑星』になったわけ	(1)イ 文章の解釈 文章の論理の展開の仕方	(1)ア 課題設定や取材，構成
分かりやすく説得力のある文章を書こう	海馬	(1)ア 語句の意味の理解 語句の効果的な使い方など (1)イ 文章の解釈 文章の論理の展開の仕方	(1)イ 記述 論理展開の工夫 適切な引用 説得力のある文章

○ 本単元における，見通し・振り返り学習活動

本単元の重点指導事項である「B書くこと」の(1)イを効果的に指導するために，既習単元「弁論文を書こう」で扱った，適切な情報収集，主張を支える根拠，序論・本論・結論の文章構成等について再度振り返りを行うとともに，「資料を適切に引用し，体に関するレポートを書く」という課題を設定し，前述の身に付けさせたい力を意識させるという見通しをもたせることが大切である。

(イ) 学習内容の関連を踏まえた「判断基準」の設定

既習単元		本単元	
単元名：弁論文を書こう		単元名：分かりやすく説得力のある文章を書こう	
評価規準			
○ 書く能力 書(1)ア 関心のある身近な出来事について，情報を選択し構成を考えて弁論文を書いている。		○ 書く能力 書(1)イ 体に関することについて，資料を引用しながら構成を意識してレポートを書いている。	
判断の要素			
ア テーマ	イ 情報収集・選択	ア 論理展開	イ 引用・出典
ウ 構成	エ 自分の主張	ウ 文章表現	エ 考えの深まり
判断基準B			
ア 身近な出来事についてのテーマを選択している。 イ 自分の主張を支える適切な情報を選択している。 ウ 「序論・本論・結論」の構成で600字程度の弁論文を書いている。 エ テーマについて自分なりの考えをもち，分かりやすい表現で書いている。		ア 自分の意見を述べ，検証しながら結論へ結び付けている。 イ 自分の考えの根拠としてふさわしい引用を用い，出典を明示している。 ウ 自分の経験を踏まえた説明や具体例を加えたり，分かりやすい言い換えを用いたりしている。 エ 予想との比較や新たな発見について適切な表現で書いている。	
【予想される生徒の表現例】 ※省略		【予想される生徒の表現例】	
なぜ血液は赤いのだろうか 部活動などで膝をすりむいたり，包丁で指を切ったりすると血が出る。では，なぜ血は赤い色をしているのだろうか？ 私は血の中に何らかの赤い物質が含まれているのではないかと予想した。 調べてみると赤血球が血液を赤く見せている，ということが分かった。詳しく説明すると，血液は体の中を流れる川のようなもので，体のすみずみまでいきわたっている。しかし，この血液すべてが赤いわけではない。赤い色をしているのは赤血球と呼ばれるもので，その中にふくまれているヘモグロビンが赤いからである。ヘモグロビンは鉄できていて，赤い色をしている。そしてこのヘモグロビンが，血液の仕事である酸素を体中に運ぶという		【既習単元の判断基準Bのア】 テーマ設定とその理由を書いている。 【本単元の判断基準Bのア】 予想や調べた内容を分かりやすく述べている。 【既習単元の判断基準Bのイ】 適切な情報を収集・選択している。	

役割を果たしている。簡単にいうと、血が赤いのは、その中にあるヘモグロビンが赤いからということになる。

ヘモグロビンは、グロビンというタンパク質にヘムという色素が結合してできていて、厳密にいうと赤いのはこのヘムなのである。この赤さのものは、ヘムの中の鉄原子だと考えられている。

このことを知って思い出したのが、口の中を切ったときのことだ。血をなめると鉄のような味がする。これは血の中に鉄原子が含まれているからなのだと思える。

血液について調べてみると、予想したとおり血液の中の赤血球が血液を赤くしているということが分かった。加えて、その中のヘモグロビンさらにはヘムという物質が赤さの元になっているということまで知ることができた。今回のことで血液についてより興味が出てきたので、さらにその働きや機能なども調べてみたい。

<参考文献 須田都三男『からだをめぐる血とさんそ』小峰書店 p. 22>

【本単元の判断基準Bのイ】
考えの根拠としてふさわしい引用を用いている。

【本単元の判断基準Bのウ】
自分の経験を踏まえた具体例を加えている。

【本単元の判断基準Bのエ】
予想に対する答えと自分の考えを述べ、全体をまとめている。

判断基準 A

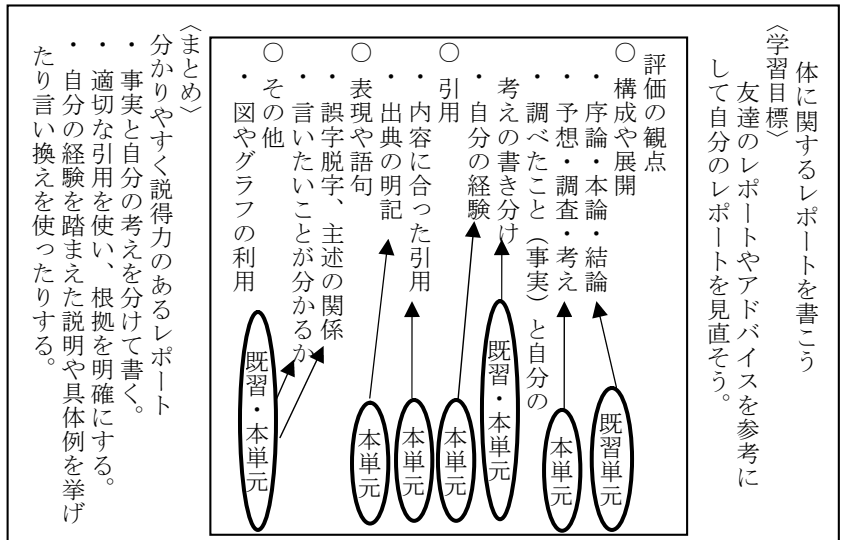
(判断基準Bに加えて) 具体的事実から一般化して自分の主張の妥当性を高めている。

(判断基準Bに加えて) 引用した資料と自分の主張が適切に結び付き、量的なバランスがとれている。

(ウ) 「判断基準」に基づく「思考・判断・表現」の指導と評価

前項の「判断基準」等の関連表では、既習単元での「課題設定や取材、構成」に関する学習が本単元での「記述」に関する指導事項の定着につながることを示した。このように「判断基準」を単元間の一連の学習の流れの中で設定することで、思考力・判断力・表現力の育成がより一層図られる。

右図は本単元における思考力・判断力・表現力が最も発揮される場面における板書である。このように二つの単元の「判断基準」を相互評価の観点として利用することで、既習の学習内容の振り返りや本時の学習内容の見通しに役立てることができた。また、生徒が付箋紙に残した級友への助言(下表)を参考に補充指導や深化指導を行った。



それぞれの観点について、どの部分に、どのように書いていましたか。

評価の観点	級友からのアドバイス
構成 論理展開	<ul style="list-style-type: none"> 本論の部分は、2段落に分けた方がいい。 自分の考えをもっとたくさん書いた方がいい。 調べた結果を基に自分の考えを書いた方がいい。
引用 その効果	<ul style="list-style-type: none"> 引用部分が言いたい内容とずれている。 引用が多いから、減らしてみるとよいと思う。
表記 分かりやすさ	<ul style="list-style-type: none"> 言葉だけでは説明しにくいものは、図を入れたい。 専門的な用語が多く、分かりづらい。

級友からの指摘を基に推敲し、レポートを完成させましょう。

- 引用と考えのバランス
- 引用部分の整合
- 適切な表記や図表の活用(間接的な補充・深化指導)

(エ) 成果と課題

- 既習単元で習得した知識・技能を振り返る活動や本単元以降で身に付けなければならない力を見通す活動を意図的・計画的に取り入れていくことで、継続的に思考力・判断力・表現力を育成することができた。
- 学習内容の関連を踏まえて「判断基準」を設定することで、単元間における思考力・判断力・表現力の見取りが容易になるとともに、生徒の実態や学習進度に合わせた具体的な補充指導や深化指導ができるようになった。
- △ 領域間や学年間の関連についても、適切な言語活動や「判断基準」を設定した思考力・判断力・表現力の育成と効果的・効率的な評価の研究を積み上げる必要がある。

ウ 高等学校第2学年 単元名「『徒然草』に学ぶ～生と死を見つめる～」

(ア) 学習内容の関連を踏まえた言語活動の充実

○ 学習内容の関連

「現代文B」の「ウ 文章を批評し、考えを深め発展させることに関する指導事項」と「古典B」の「ウ 思想や感情を的確にとらえ、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすることに関する指導事項」の関連

○ 本単元「古典B」における、知識・技能の活用を図る学習活動

本単元の展開の段階で、次の4点についてまとめたり表現したりする。

<ul style="list-style-type: none"> ・ 「徒然草」(第93段)に描かれている古人の考え方の的確な理解(200字程度) ・ 古人の考え方が生じた原因についての思考・判断(200字程度) ・ 古人と現代人の生き方の比較を通じたそれぞれについての思考・判断(200字程度) ・ 自分の生き方についての思考・判断(200字程度) 	}	800字程度
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---	--------

○ 本単元「古典B」における、見通し・振り返り学習活動

本単元の導入の段階で、既習単元で行った学習(李徴の心情の的確な理解→李徴の心情の生じた原因に関する表現→李徴と現代人の生き方に関する表現→自分の生き方に関する表現)を生かして本単元の学習を行い、「自分にとっての生き方について考える」という学習課題を解決しながら上記の4点についてまとめたり表現したりすることを見通す。

終末の段階では、展開の段階で表現した4点を踏まえて、古典(古文)を読む能力が育成されたことについて振り返る。

(イ) 学習内容の関連を踏まえた「判断基準」の設定

既習単元	本単元
単元名: 「山月記」を読み深める ～自分を見つめる～ 教材名: 「山月記」中島敦	単元名: 「徒然草」に学ぶ ～生と死を見つめる～ 教材名: 「徒然草」(第93段)兼好法師
評価規準	
○ 李徴の心情と現代人や自分自身の心情とを比較しながら自分の考えを深めている。	○ 本文の「無常観」と現代人や自分自身の「死生観」とを比較しながら自分の考えを深めている。
判断の要素	
ア 李徴の心情の的確な理解(第1段落) イ 李徴の心情の生じた原因に関する表現(第2段落) ウ 李徴と現代人の生き方に関する表現(第3段落) エ 自分の生き方に関する表現(第4段落)	ア 古人の考え方の的確な理解(第1段落) イ 古人の考え方の生じた原因に関する表現(第2段落) ウ 古人と現代人の生き方に関する表現(第3段落) エ 自分の生き方に関する表現(第4段落)
判断基準B	
ア 「山月記」における「臆病な自尊心、尊大な羞恥心」の意味を的確に捉えている。 イ 李徴の「臆病な自尊心」を抱く原因と、それに通じる現代人の心情について適切に表現している。 ウ 李徴の「臆病な自尊心」に対する向き合い方と、現代人の向き合い方について適切に表現している。 エ 自分の生き方について表現し、まとめている。	ア 「徒然草」における「無常」と「生を愛す」の意味を的確に捉えている。 イ 「徒然草」執筆時の時代背景と、現代人の「死」に対する考え方について適切に表現している。 ウ 「徒然草」に表現されている生き方と、現代人の生き方を適切に表現している。 エ 自分の生き方について表現し、まとめている。
【予想される生徒の表現例】 李徴は自分が虎になってしまった理由を「臆病な自尊心、尊大な羞恥心」のためだとしている。この「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」のいずれも自分の中に「優越感」と「劣等感」という両極の心情があったことを示しているとも言える。そのために、李徴は、才能がないという「劣等感」のために「刻苦して磨こう」とせず、また一方では、才能があるという「優越感」のために「碌々として瓦に伍する」こともできなかったと言えよう。ア 「臆病な自尊心」の原因は何か。李徴は幼いころから「郷党の鬼才」と呼ばれるほどの才能にあふれていた。しかし、その能力の高さゆえにかえって傷つきのを恐れたために「臆病な自尊心」が強まったのではないか。つまり、彼はプライドを守ることに執着し、それによってかえって挫折してしまったのだ。この心情は現代人においても、同様に感じるものであろう。傷つきのを恐れるという心情は、むしろ現代人の方が強いかもしれない。イ	【予想される生徒の表現例】 「徒然草」(第93段)の前半では、牛が突然亡くなったことをきっかけに、死は「はからざる」ものとして突然訪れることが書かれている。これが人の命にとっての「無常」である。それゆえ、「一日の命、万金よりも重し」と言う。後半では、「無常」だからこそ「生を愛すべし」、「存命の喜び、日々楽しまざらんや」という生き方が必要だと言う。しかし、普通の人々は「死の近き事」を忘れて「存命の喜び」よりも「外の楽しみ」を求める。ア こういった「無常」という考え方が生じるのはなぜか。その原因として「徒然草」が執筆された時代は政治が乱れ、飢饉等によって人々の生活は絶えず不安な状態にあったことが挙げられる。全ては「無常」であり人の命も不確かなものだと感じやすい時代だった。一方、現代の状況はどうか。死はいつ訪れるか分からないという事実は現代でも変わらない。災害や事故、病気といった不慮の出来事によって人の命は奪われるものだ。イ

<p>では、この「臆病な自尊心」にどう向き合えばよいか。虎となった李徴は、強い後悔を示しながらも「自嘲癖」から抜け出すことはできず、最後まで自尊心の呪縛から逃れることはできなかった。現代の我々はどうか。競争社会と呼ばれて久しい現代においては、勝ち抜くことをよしとして「プライド」こそもつべきものだと叫ぶ人もいる。このような社会の構図の中で、自尊心は焚きつけられていると言えるのではないか。ウ</p> <p>この「自尊心」と私自身はどう向き合いどう生きていけばよいか。私は「自尊心」は諸刃の剣だと思う。それが強くなりすぎると李徴のように成長を妨げることになりかねない。しかし、プライドがあるからこそ頑張ろうという気持ちになるのも事実だ。傷つくことを怖がり、自分の能力や可能性を無駄にはしたくない。本当の「自尊心」は決して傷つくことを恐れることではないだろう。私は将来を見つめ、今できることを懸命にやっていきたい。エ</p>	<p>では、どう生きるべきか。「徒然草」では「存命の喜び」を「日々に楽しむ」ことが大切だと言う。このことは、「世捨て人」となって「外の楽しみ」ではなく「生」そのものを楽しもうとした兼好法師の生き方にも通じる。一方、現代人はどうか。金銭を求めたり、趣味に励んだり、様々な技術を磨くことなど、人それぞれに異なるだろう。大切なことは、今できることの可能性を生きることであり、それが現代人の「生を愛す」ことなのではないか。ウ</p> <p>谷川俊太郎の「生きる」という詩に「生きるということ／それはすべての美しいものに出会うということ」という一節がある。私は今、美術部に属している。油絵を描くこと。自分の思いをキャンバスにぶつけて、自分にも予測できなかった「美しさ」にたどりつきたい。様々な作品を鑑賞したい。それが今の夢であり「生を愛す」ことだと思っている。それが自分の「生」を最大に発揮することにつながっていくのではないだろうか。エ</p>
判断基準 A	
(判断基準 B に加えて)「他者との関わり」などの新たな視点から多角的に生き方を考えて表現している。	(判断基準 B に加えて)「自分の将来」などの新たな視点から多角的に生き方を考えて表現している。

(ウ) 「判断基準」に基づく「思考・判断・表現」の指導と評価

次は、本単元の展開の段階における生徒の作文である。

<p>「徒然草」における「無常」とは一切のものは変化し、生あるものは必ず死ぬという考え方であり、「はからざるに牛は死し、はからざるに主は存ぜり。」とあるように、動物も人も自分の死を予期することはできない。一日の命は決して当たり前ではなく、だからこそ一日の命は万金よりも重いのである。そのため「無常」において死を憎むならば、生を愛し存命して命のある毎日を楽しまなければならない。ア</p> <p>「徒然草」が記された当時の京都での時代背景には天変地異や飢饉、また戦の絶えなかった京都も安全ではなくなり、時代の動きも人々の生活も「無常」であった。当時と現代を比べると、当時の人々は自分の死が近いことを知った時に「無常」について考え、現代の人々は身近な人が死んだ時などに「無常」について考える。しかし、当時と現代では時代背景が大きく変わり、現代は戦もなく飢饉もないため、普段の生活の中で「無常」について考える機会が少ないと思われる。今の時代だからこそもっと多くの人が「無常」について考えるべきだと私は思う。イ</p> <p>「徒然草」において、生を愛す生き方とは、死のことを忘れず今生きていることそのものを楽しむという生き方と考えられる。現代人にとっても、今、何不自由なく暮らせていることを当たり前と思わずに、一日一日を大切に、そして楽しんで生きるべきだと私は思った。ウ</p> <p>「徒然草」という作品を読んで、私は現代ではあまり考えることのない「生と死」そして「無常」について考えながら生活していこうと思った。また、瀬戸内寂聴の言葉に「どんなに好きでも最後は別れるんです。どちらかが先に死にます。人に逢うということは必ず別れるということです。別れるために逢うんです。だから逢った人が大切なのです。」とあり、人と人の別れは予測できないが、だからこそ私は出逢った人を大切にしていこうと思った。エ</p>

「判断の要素」**ア～エ**のうち、**エ**に具体性が不足しているので、C 状況と判断できる。

この生徒に対しては、**エ**の表現を手掛かりにして、「具体的にどのようにすることが出逢った人を大切にすることになると考えますか。」という発問により、補充指導が実現できた。発問に対して思考・判断し、「友達同士で困っている時などに悩みが和らぐように励まし合いたい。そのためには、自分を見つめて人を思いやる心を高めていこうと考える。」と表現した時点で B 状況であると判断した。

さらに、「人生全体を通して『生き方』を考えた場合、将来社会人としてどのように他者を大切にすることが『存命の喜び』になると考えますか。」という発問により、深化指導が可能となった。「将来どのような仕事に就いても、周囲の仲間とコミュニケーションをとり、お互いのできないことを補い合って社会に貢献できたら『存命の喜び』になると考える。そのためには、自分のできることを身に付けていこうと考える。」と表現できた時点で A 状況であると判断した。

(エ) 成果と課題

○ 「現代文 B」と「古典 B」の「読むこと」の学習内容を関連付けることで、「判断の要素」をそれぞれの段落に位置付けた作文を書かせることができ、さらに、その作文を評価の対象として指導することができた。

△ 「読むこと」の単元において、生徒が既に身に付けている書く能力を活用させる指導を、より一層充実する必要がある。